

初心忘るべからず 榎本栄次

結婚式や入学式、入社式のメッセージに「初心を忘れず」というお言葉を聞くことがよくある。これは世阿弥の能楽書「花鏡」からの引用である。しかしその本意は多くの場合違って使われている。

初心とは、初めの志という意味ではない。未熟な者が初めて経験する初々しい気持ちのことである。世阿弥は「是非（若いころ）の初心忘るべからず。時々（壮年のころ）の初心忘るべからず。老後（年取ってから）の初心忘るべからず」と言う。

結婚する若者にとって、70歳、80歳になっても結婚当時約束した「初心を忘れるな」と言われても無理な話だろう。初心とはそのような意味ではない。その時々気づかされる「ああそうだったのか」と言う初々しい気持ちである。老後の二人にとっての初心は、その時の出会いでなければならない。それを初心と言うのだ。そこでは20代とは比べものにならないほど高度な出会いがあるはずである。老後、若いころに帰ろうとするなど愚かなことである。年寄って発見すること、出会う素晴らしさがある。それを忘れるな。何もできなくなった老人、死を前にした者にも求められる言葉でもある。

神学者カール・バルトも「年寄りの知恵」について同じようなことを言う。

「老いは、単なる老化や経験による知恵を身に着けることではない。・・・老人の知恵とは、若い時のように気負いをもって自分が主体となって神に出会うのではなく、神が自分と出会ってくださり、受け入れられ、そのような仕方

で神に服従することが赦されていることを知

る知恵を身に着けることである」と。
先日、同郷の友、松平吉生君が天に召された。77歳であった。2年前、末期がんを宣告されて以来、千鶴子夫人と最後の人生を静かに楽しんでおられた。若いころ故榎本保郎牧師に出会い、キリスト者となった。長年高校の国語の教師を務められ、退職後は俳人として活躍されていた。わたしも時々指導していただいたが、いつも適格で厳しいものであった。彼の辞世の句に出会い、改めてその生きざまに感動した。

君知るや かの桃源郷の 花まつり

この句は彼の心境と人柄を実によく表現していると思う。ここで「君知るや」というのは、「君は知っているかい。僕は今、初めて知ったよ」という初めて知った喜びを表す枕詞であろう。「桃源郷」とはどこか特別な場所ではなく、花々に囲まれた天国のような別世界のことである。前に置かれた「かの」で、他ではないここだ、今だ、という特別の場所と時間を指定している。それは滋賀県にある「おしどり」というお年寄りのケアハウスのことである。彼はそこが好きで花まつりなどには遠く宝塚から必ず出かけ楽しんでた。ここに行った者はだれもが、なるほどと思う、まさに桃源郷のような里である。去年の春ここを訪れたときに詠んだ最後の句だそう。以降彼はほとんど寝たきりでしゃべれなくなった。

「君知るや」と言うようにここで初めて知った出会いがあったのだろう。千鶴子夫人に「僕の人生は君に出会えてとても幸せだった。ありがとう」と言い、介護する周りの方たちには「ありがとう」と言いながら静かに眠りについた。「老後、初心忘れず」の人であった。

✧なんどきですか ✧

・女兒はアンケートで「お父さんにたたかれます。何とかしてください」と救助を求めていた。そのコピーを父親に渡していたという情けない教育委員会には呆れるばかりである。この人たちは教育を語る資格がないと思う。守るべき立場にある者が加害者になってしまう。気をつけたいものである。

・韓国と日本の政府がぎくしゃくしている。日本が犯した侵略という事実を認めたくないのだろう。いつまでも引きずってしまう。勇気をもって「ごめんなさい」が言える国家になってほしい。

・平成が終わろうとしている。天皇が神となるような時代にはならないように主権在民の憲法を大切にしたい。

投稿

京都俳句きらら会他

- ・冬の雨 天空映す 黒き坂 信岡
- ・新年の年始め免許返納す 公女
- ・七草や香り沸き出す粥の湯気 星児
- ・凧を背に路地を駆けゆく幼き子 茶香
- ・冬の京和服にブーツ八坂かな 小次郎
- ・平成の終わり優しき暖の冬 海楽
- ・精進の道真直ぐなり寒の月 岳
- ・遠鐘や静寂の中冬木立 虚舟

◇おさそい◇

「聖書をいっしょに読みましょう 2019」

座長 榎本 栄次（関西セミナーハウス所長代行）

月曜 13:30～16:30

- ① 4月 8日 ⑤ 9月 2日
- ② 5月 13日 ⑥ 10月 7日
- ③ 6月 3日 ⑦ 11月 11日
- ④ 7月 1日 ⑧ 12月 2日

4月20日（土）13:30～17:30

修学院フォーラム「社会」①<平和を考える-1>

「ボンヘッファーの平和倫理」

講師 山崎 和明（四国学院大学名誉教授）

♥有り難うございました♥

関西セミナーハウス活動センターへの賛助・寄付金

2018.11.1-12.31 順不同・敬称略

鳥井 清司、藤田 敦子、佐野 千枝子、細田 和民、白子 宗令、坂本 登、松本 圭子、奈倉 道隆、日本基督教団西が丘教会、中村泰洋園 中村英明、株式会社三原工務店、飯田 ふみ子、匿名、都木 弘子、安藤 信策、宮本 桂子、牛尾 宣夫、島田 恒、小林 哲夫、竹中 百合子、長谷川 義弘、株式会社祇園辻利、社会福祉法人修光学園、柳井 一郎、山田 幸子、山本 康夫、日本キリスト教会吉田教会、浅野 献一、手銭 秀夫、小山 稔、脇坂 照世、徳丸 延子、糸原 良禎・由美子、井上 明・きみ子、木原 諄二、家形 日出、今井 奈都子、中西 綾子、東 千代、間瀬 啓允、高橋 壮二、白方 誠彌、杉本 尚司、日野 多栄子、真鍋 裕子、川北 かおり、和田野 勢津子、阿部 志郎、森 ユキエ、在日大韓基督教京都教会

四季だより

～兆し～

関西セミナーハウス庭園担当 榎 廣光

冷え切った指先に息を吹きかけながら、きらら山荘近隣にある竹林を覗いてみた。あちらこちらに掘り返した跡が残っている。まだ新しい。深さは30～40cmくらいだ。猪の仕業だ。猪は冬場のエサとして竹林の土を掘って竹の子を食べている。今の時期もう地中に竹の子が出ているということを学習している。猪にはすばらしい嗅覚と鼻先の驚異的なパワーがある。60～70kgくらいの石を転がすそうだ。掘り返された穴の跡を目で追っていった。と、穴のひとつに竹の子が顔を覗かせている。にぎりこぶしの半分くらいの大きさだ。「兆し」を見つけた。もちろん暦の上でも立春である。地肌で感じる晴はまだ先だが。心なしかウキウキである。料理界も春を先取りして筍がお膳に上がる時期である。猪が一番早く春を先取りしているのかもしれない。因みに「たけのこ」はタケノコ、竹の子、筍、筍といった表記の仕方があるようだ。